

目的：食嗜好の形成については、多くの要因が考えられる。食嗜好には習慣的要素があり、人それぞれの生活経験が影響する。特にその中でも食べた経験が大きく反映すると思われる。そこで、食体験を摂食頻度ととらえ、食嗜好との関連を調べた。

又、主な調理担当者である母親の食事づくりに対する意識との関連も調べたので報告する

方法：調査対象は神戸市保健所で3歳児検診に訪れた母親154名、調査内容は13食品36種類の調理形態に関して、5段階尺度で調理頻度、母親の嗜好、子供の嗜好について自己記入してもらった。調査時期は昭和60年8・9月である。

結果：①社会的学習が充分になされていない3歳児においては、食嗜好形成に及ぼす食体験の影響は大きいと言える。36種類の調理形態について、ほとんどの品目に、摂食頻度と嗜好性の関連が認められた。

②母親の食事づくりに対する意識を3つのパターンにわけた。イ) 食事づくりを楽しみとして、家族の好きなものを毎日の献立にとり入れているグループ19%、ロ) 栄養を重視し、家族の健康は食生活から始まると考えているグループ63%、ハ) 毎日の献立を考えるのが面倒で、なるべく手間のかからないものと考えているグループ18%、

③母親の食事づくりに対する意識と、献立作成や調理頻度との関連を調べた。その結果、栄養重視型のグループは、そうでないグループに比べ、人参のグラッセ、レバーの煮付、刺身、シューマイ、チーズ、納豆、レタス、において、カイニ乗検定で有意の差が認められた。